

イエスの言葉やふるまいは不動の真理で、それを前にして私たちが悔い改め、変えられていくことが信仰、だとされている。ところが、イエスに幾度も拒絶されながら怯まない女の信念によって、イエスの方が次第に変えられていく場面があるじゃないか(マタイ 15:21~28)。これは、どういうことか。

「世話情浮名横櫛」というと歌舞伎通のようだが、その中の与三郎の名文句なら誰もが知っている。「御新造さんえ、おかみさんえ、お富さんえ、いやさこれお富、久しぶりだなあ」と迫っていく、あれだ。この与三郎と、イエスの拒絶に動じないカナンの女(15:22)が重ね見えてしまった。

御新造さんとは富裕な町屋の妻、おかみさんは庶民の妻。そして敬した「お富さん」から呼び捨ての「お富」へ、グイグイッと距離を縮めていく言葉の遠近法は、福音書のこの場面にもあるんじゃないか。

神と人との間には断絶があり、それを乗り越えて来るのはキリスト、だとされている。だがこの場面では女が障壁を乗り越えて来た。イエスは異邦のフェニキアに赴きながら(15:21)、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない(15:24)」と妙に閉鎖的だ。

フェニキアに住むこの女は、ヘブライ人がカナンに入植する以前の先住民(15:22)。それにそもそも、女がラビにひれ伏して直接頼みごとをする(15:25)なんてことはまずありえない。これでもう三重の壁になっている。

だからイエスは、女の必死な懇願に対して(15:22)、「何もお答えならなかった(15:23)」。また弟子たちは女を狂人扱いして追い払おうとする(15:23)。ただこれは常識的な拒絶だ。

ところが緘黙していたイエスはやや軟化して、「イスラエルの家~にしか遣わされていない(15:24)」と否を告げた。否を突き付けられても、「女は来て、イエスの前にひれ伏し、[主よ、どうか助けてください]と言った(15:25)」。

イエスの態度は否だが、なんと女との対話が成り立ち始めているではないか。するとイエスは「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない(15:26)」と拒絶の理由まで伝えた。

子供たちとはイスラエルの民、小犬とは彼女ら異邦の民のこと。イエスは、緘黙から説明する態度へと変っていった。

「娘が悪霊にひどく苦しめられ(15:22)」、それを何とかしたいと、女はグイグイッと壁を乗り越えてイエスとの距離を縮めていく。これが生きていたお富に迫る与三郎を思い起こさせた。

そして女が「小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです(15:27)」と応ずると、ついにイエスは「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように(15:28)」と認め、娘は癒された。

それにしてもイエスの拒絶は何だったのか。律法、すなわち神の御心をリストアップしたような決まり事は覆される。それが異邦の、先住民の、名前のない最底辺の「女」の苦しみによって実現した。

イエスへの壁はそのまま世の壁であった。苦しみが壁を突き抜け、最底辺の無力が壁を崩壊させた。

「わたしの方が正しくても、答えることはできず、わたしを裁く方に憐れみを乞うだけだ(ヨブ 9:15)」。ヨブは頑ななまま、自分の限界に気づき始めた。

「しかし、わたしが呼びかけても返事はなされるまい。わたしの声に耳を傾けてくださるとは思えない(9:16)」と御心を押し量る。だが女は、御心を押し量る余裕なく求め続けた。娘が快復する前に、イエスは女の信仰を認めた。この信仰こそ奇跡(マタイ 15:28)。



#### 《おまけのひとつ》

世には壁がある キリストには壁がない 壁のないキリストに近づけても新たな創造は起こらない  
キリストは世にあり キリストに迫るには世の壁を突き抜けねばならぬ 創造は破壊を含んでいる